〈ショートショート〉

イラスト・文：神谷圭介、構成：服部円

コントユニット「テニスコート」のメンバーであり、作家・俳優として活動する神谷圭介氏が綴るショートショート。

「シャコと宗教」

「大将、シャコある？」
食通そうな男性客が寿司屋の店主に尋ねた。先ほどまで威勢の良かった店主の表情が一瞬だけ曇ったように見えた。
「すいませんね。うちはシャコ握ってないんですよ」
目を伏せたまま慣れた口調で返す店主。さほど申し訳なさそうな様子はない。
「そうなの？」
「ええ。宗教上の理由でして」
宗教上の理由で握れない寿司ネタがある事をそのとき初めて知った。
はじめてのカウンターの寿司屋に緊張していた僕は、このやり取りを聞き不意に小学生の頃の記憶が蘇った。
運動会でひとりだけ騎馬戦に参加しないことを許された同級生がいた。自分だって上半身裸で組み合い赤白帽を奪い合うような競技に参加したくはなかったが、担任の説明によると笹本君は「宗教上の理由で」騎馬戦には参加できないとの事だった。詳しくはわからないがとにかく「宗教上の理由で」と言われたら大人もそれ以上は踏み込めない様子だった。子供心にそれは最強の理由なのだと感じた。
その後しばらくクラスでは「宗教上の理由で」という言い訳が流行った。笹本君は内心いい気分ではないはずだが、ただにこにこしていた。小5の初めに転校してきた笹本君は6年生に上がり新学期が始まって早々にまた転校していってしまった。先生は「親の仕事の都合で」と理由を話した。事実そうなのだと思うけどクラスの全員の頭には別の同じ理由が浮かんでいた。

旅館の廊下に飾られていた浮世絵には巨大なエイリアンのようなものが暴れている様が描かれていた。このような生き物が実在するわけはないと思いながら、江戸時代に描かれたにしてはコミカルで現代のイラストのような絵に親近感を覚えた。
「1885 年頃かな。安政2年に大地震があってね。江戸だけでも1万人の死者が出たらしいんだけど。これはその頃に描かれたもの」
額に飾られた絵を見ている僕の背後から影山こずえが饒舌に語り始めた。
影山こずえは大学のサークルで出会った学年がひとつ上の先輩だった。
「詳しいんですね」

 © Culture and Biology

「あ。また敬語」
「あ。ごめん」
１年半以上もこずえ先輩と呼んでいた彼女を付き合い始めて急に呼び捨てにすることに僕はまだ躊躇していた。
「これ何がモチーフなのかな。えび？」
「ううん。シャコ」
シャコがどんな形の生き物なのか知らなかった僕はこの絵で初めてシャコの全貌を知った。
「安政の大地震は東京湾北部が震源地と言われてるんだけど、当時江戸では、地震は海底に住む巨大シャコが暴れると起きるっていう民間信仰が流行っててね。こうして錦絵にもなって江戸中で流行したの。石楠花絵っていうジャンルで」
「シャクナゲエ？」
「あ、シャクナゲはシャコのこと。江戸時代はそう呼ばれてたの。茹でると殻が紫色になって石楠花の花の色と似てたから」
その花の名前すら知らなかった僕にとっては何の絵も浮かばない話だった。
自分が今まで全く知らなかったし知らないままでもよかった話だったが、好きな女の子の話ならこんなにも耳を傾けられるものなのだと我ながら感心した。今でこそ高級食材のシャコだが江戸の頃は漁獲量も多く、安価で親しみやすい寿司ネタであったのだという。
「シャコでも食べて地震を退治しようって、弦担ぎにもなってたみたい」
そう言って彼女は笑った。笑うところなのかはわからなかったが僕も一緒に笑った。
「でも、こずえはシャコ食べれないって言ってたよね。宗教上の理由で‥」
「うん。そう。うちはそうなんだ」
シャコの話に紛らわせ、はじめて彼女を呼び捨てにした。
そのことは彼女にも伝わっていたようだ。
「シャコが神様みたいなことなの？」
「いや。そういうんじゃない。まあ神様の使いみたいな事かな。とにかく神聖な生き物。だから食べちゃだめ」

長い石の階段を登りながらもこずえの話は止まらなかった。
「江戸の人はすごくユーモアがあったんだよ。まだ電気のない時代だから夜は本当に真っ暗な暗闇があって。その暗闇を恐れるあまり、江戸の人は妖怪という存在を作るの」
ずっと帰宅部だった僕と違い陸上部で中距離を走っていた彼女は喋りながら石段を軽々と登っていく。息も全くあがっていない。
「妖怪のしわざだと思えばすこし楽になると思わない？」
「妖怪のしわざ？」

短いショート丈のパンツからすらりと伸びた太ももとしなやかなふくらはぎが眩しい。
「今で言う陰謀論みたいな？ ほら。あれって精神安定剤になってるっていうでしょ？」
「精神安定剤？ 陰謀論が？」
「理由や原因がわからないのって不気味だし不安でしょ。誰かのしわざだって思ってたほうが楽になるんだよ。わかったような気持ちになれるから。妖怪や石楠花絵もそう」
やっと鳥居まで到着し思わず膝に手をつく。足に乳酸が溜まっている。目の前のこずえが鞄にぶら下げている小さなぬいぐるみに目が止まる。随分前から彼女が鞄に付けていたものだがあまり気にかけたことがなかった。よく見ればそれがシャコである事に気がついた。
「ねえ。‥もしかしてこれも」
「そうだよ。しゃーこ君」
「しゃーこ君？」
しゃーこ君とはピーポ君と同様に警視庁が作ったキャラクターで、こずえ曰く地震災害時の緊急交通路を表す道路看板に描かれているマスコットキャラクターなのだという。
「いわゆるシャコ看板だよ」
「いわゆる？」
「江戸の地震の象徴だったシャコが、地震災害時の緊急交通路のマスコットとして今も残ってるんだ」

検索画像を見て確かにどこかで見たことがあったような気がしたが、何かと空見してるのかもしれない。ただ単にこずえのぬいぐるみで見慣れていただけかもしれない。

「この神社だってシャコの神社なんだよ」
神社の鳥居に掲げられた額を見る。そこには青龍蝦神社と書いてある。
「青龍蝦神（せいりゅうげ）神社。一般的にはシャコは蝦（えび）に蛄（けら）って書くんだけど、青い龍の蝦でもシャコって読むんだよ」
「そうなんだね」
そうなんだねとしか言えなかった。
お互いが好きなアニメの舞台となった神社に聖地巡礼で訪れたつもりだったが、それまでもがシャコに導かれていたのかと思い少し不思議な気持ちになった。
アニメのカットと同じ場所でお互い写真を撮り合い神社を後にしようとしたとき、彼女が鞄から御朱印帳を取り出した。
「私、御朱印集めてるんだ」
そう言っていそいそと授与所に向かうこずえ。
「宗教上そういうの集めるのはありなの？」
「え？」
「神社仏閣は仏教でしょ？」
「ああ。確かに‥」
ほんの少しだけ考えた彼女だったが即座に
「まあいいんじゃない。旅の記念で集めてるだけだし」と軽い答えが返ってきた。
信仰の度合いにもよるのだろうか。こずえの匙加減なのかもしれない。
「園田君もこれを機にどう？」

そう促され初穂料を払い、御朱印帳を購入させられた。
神社の宮司さんの手により目の前で見事な御朱印が書き上げられていく。確かにこれは集めたくなる理由もわかる。見事な技術と絵も言われぬ有難さがある。
青龍蝦神社の御朱印はどことなく書体全体がシャコの姿を表しているようだ。改めてこの旅行はシャコの旅なのだという想いが強まった。

令和七年六月十三日

旅館に帰りその日はじめて彼女と共に一夜を過ごした。何度もした。空が明るくなるまで何度も何度もした。僕たちは二人には広すぎる和室の至る所で何度も交わった。疲れ果てた僕らは裸のまま畳に寝そべった。

小学生の頃一度だけ笹本君の家に行ったことがあったのを思い出した。
「おもしろいもの見せてあげる」
そう言って笹本君は僕を子供部屋から連れ出し広い和室に入った。親族が集まるようなとても広い和室だ。大きなちゃぶ台に置かれていたリモコンのボタンを笹本君が押す。すると突然機械音が響き渡り、壁だった部屋の一面から大きな仏壇のようなものが迫り出して来た。繊細な木彫が漆や金箔などで装飾された豪華絢爛な祭壇。平面から面白いくらいにテンポよく立体的な祭壇が自動的に組み上げられていく。
それはまるで当時見ていたロボットアニメのようだった。ある日小学校のクラスが地球防衛隊として悪と闘うことになるアニメだ。いつもの教室がボタンひとつで次々とトランスフォームし巨大ロボットのコックピットになるアニメだった。
僕は興奮して思わず声をあげてしまった。
そのトランスフォームがおもしろくて、ボタンを何度も押しては、祭壇を出したり引っ込めたりした。何度も何度も繰り返して遊んだ。出始めてはすぐ戻したりまたすぐ出したり。何度も何度も繰り返した。その度に僕らは広い和室を笑い転げた。そのあと帰ってきた笹本君のお母さんにめちゃくちゃに怒られた。僕の親も厳重な注意を受けそれ以降、笹本君と遊ぶことは許されなかった。
もしこずえと僕が将来的に結婚することがあったとする。次男である僕は一人娘の彼女の家に婿入りする可能性もある。そのときは僕も彼女と同じ宗教に入信することになるのだろうか。シャコが食べられないくらいであれば僕は別に困らない。そしてなにより、シャコを勧められたとき僕は、最強の言い訳を放つ事が出来るようになる。

終わり

神谷圭介（かみや・けいすけ）
武蔵野美術大学卒。コントユニット「テニスコート」のメンバー。舞台と映像のプロジェクト「画餅」の主宰。作家・俳優として活動。またイラストやロゴデザイン、映像デザインなども手掛ける。
画餅　https://www.emochi.info/news/
X　https://x.com/kamiya_keisuke

＊本作品は創作です。特定の生物や宗教を否定したり揶揄するのものではありません。